

## 渡辺先生に学ぶ

新川 登亀男

渡辺先生が亡くなられた、私には、このようにしか言い表しようのない気持ちでいっぱいである。私が先生にはじめてお会いしたのは、一九七四年(昭和四九)の後半であった。東京本郷の学士会館で、竹内理三先生につれられてのことであったが、実はそれは一種の面接試験であったろう。なぜなら、大分大学を退官される渡辺先生の後任人事が進んでいたからである。何を聞かれ、何をお答えしたか詳細は記憶にないが、会館内のテーブルの位置や、荘園講座企画のお話は今でもよく覚えており、研究者としての迫力を感じたものである。また、この人間で自分の後任は果たして大丈夫だろうかと不安がられていたようにもみうけられたが、それは私の思いこみであろうか。

幸運にも、私が大分大学に採用された当初一年間は、先生も講師として古文書学を講じられた。火元責任者の交替したかつての研究室に入られることはほとんどなかったが、一度だけ、「人も変われば、本も変わるな」とおっしゃった時の寂しそうなお姿を今もよく記憶している。新任の私は、そこに去ることの人生を同時に学んだ。

その後、私は、在任五年という短い期間ではあったが、先生の公私にわたる加護とご指導を受けることができた。『大分県地方史』に書かれた先生の論文を読みあさり、図書館の蔵書にはさまれた先生のメモに学び、古文書の研究会にも出させていただき、古代史の研究会活動も大分に助けていただいた。また、大分県史の各種事業や六郷満山文化財調査などで勉強の機会を与えて下さった。東京への学界出張もご一緒させていただいて、荘園研究報告の講評を拝聴したこともある。結婚のご心配まで色々とおかけしてしまった。

先生に最後にお会いしたのは、一九九五(平成七)の春、宇佐市でのシンポジウムにおいてであった。先生は、大分市からわざわざ会場の楽屋裏まで尋ねてこられ、報告する私を励まされた。以前と少しもかわらないお姿に接し、うれしくもあり、恐縮至極でもあった。不慮の外、先生に向かう最後の報告となってしまったが、前方中央の座席で先生は、私の不勉強さに氣をもまれたことであろう。

その時の講評は、ついにかがうことが出来なかった。心残りではあるが、奥様に招かれるようにして逝かれた先生のご冥福をお祈りするばかりである。

(早稲田大学教授)